

八島建築設計事務所 八島正年・八島夕子

10の 住まいの物語



八島建築設計事務所 八島正年・八島夕子



10の 住まいの物語

家は、時を重ねて
「住まい」になる。

郊外、都市型、終の住処、
二拠点居住……
それぞれのカタチに合った、
自由な暮らし。
人気建築家が手がけた、
美しくもおおらかな
10の住まいの物語。

玄関を抜けると
窓から零れそうな緑と
沢山の木が出迎える



リビングの床は地面から70センチほど低いレベル。コーナーに位置する柱のない横長の開口部は開放感いっぱい、目の前の下草や池に手が届きそうな気分。



鳥が来るのは、溜まりのない通り抜けできる庭。道路から玄関まで建物の周囲をぐるりと歩くうちに、自然に半地下に導かれる仕組みになっている。

ゆるゆるとアプローチを下り、さらに玄関から2段下がったリビングで庭を眺めていると、木漏れ日の中で地面を這う生き物の気持ちになつてくる。

「さつき、キジバトのカップルが来てたんですよ！」と嬉しそうな顔で真っ先に言うのは八島さん。「あれはヒヨドリ用のリンゴ、向こうはシジュウカラの巣箱。この辺の鳥は、食べ物がいいせいか都会の鳥よりスタイルがいいんです」。そう、この家は八島さんが熱心な野鳥ファンになるきっかけを与えた家である。

本と野鳥と文房具

大学教員のHさん夫妻が、流山市内で開発途中の土地を購入したのはかれこれ10年近く前のこと。区画整理に思わぬ年月がかかり、最初に八島さんを訪ねてから数年の間が空くことになった。夫妻が新居に望んだのは、膨大な量の本を収められる本棚と、鳥を眺めるための庭。参考資料として『野鳥を呼ぶための庭づくり』という本を手渡された八島さんは、じっくり勉強するうちにHさんたちも舌を巻くほどの鳥好きになつてしまった。

壁を埋め尽くす本のはほとんどはご主人のもので、子供の頃に読んだ児童書やコミックスから近代文学、古典文学、美術・建築、歴史、民俗学、自然科学……ありとあらゆる分野の本が揃っている。専門である物理学の本や、奥さまの原子力工学関係の本はそれぞれの大学の研究室に置いてあるので「家にあるのは趣味のものばかり」なのだ。鉛筆愛好家であるご主人ご自慢のファーバークастел社の文具コレクションはちよつとした資料館が開けるほどで、並んでいる本やモノを見ていると飽きることがない。

「この本の量なので、ハウスメーカーの家じゃとても収まりきらないだろうと思つたんです」と夫妻。建築本を山のように買い込んで、造り付けの本棚が印象的な家、玄関から庭にか



右/周囲よりも低く抑えられた建物。まわりの環境の変化に影響を受けないよう、塀と庭の木々で包み込んだ。
左/庭には鳥が集まるよう実のなる木が植えられている。



上/よく遊びに来るキジバトのカップル。下/ご主人はファーバークастел社製文具の日本有数のコレクター。これはネットオークションで購入した19世紀の鉛筆。

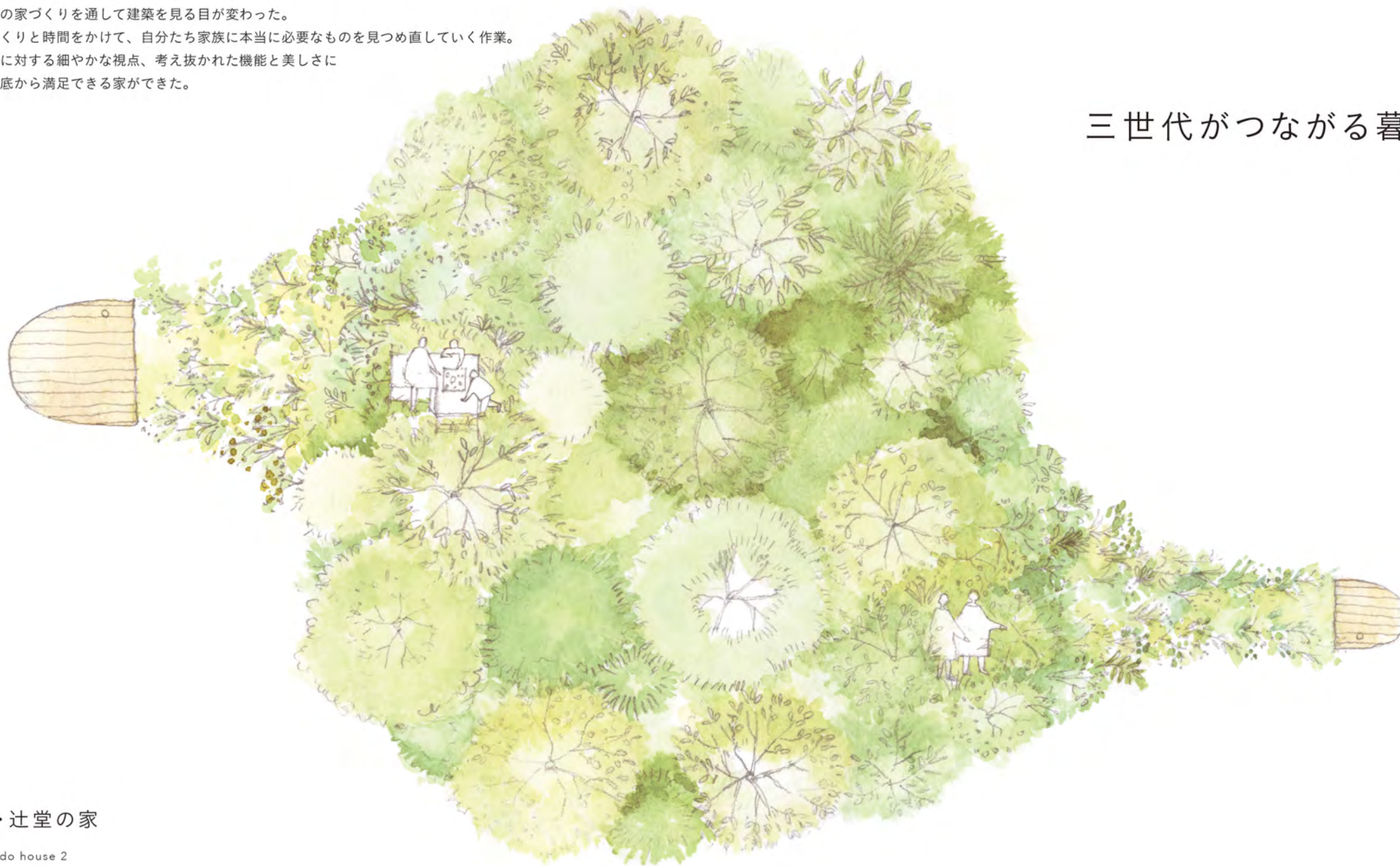
両親の家づくりを通して建築を見る目が変わった。

じっくりと時間をかけて、自分たち家族に本当に必要なものを見つめ直していく作業。

生活に対する細やかな視点、考え抜かれた機能と美しさに

心の底から満足できる家ができた。

三世代がつながる暮らし





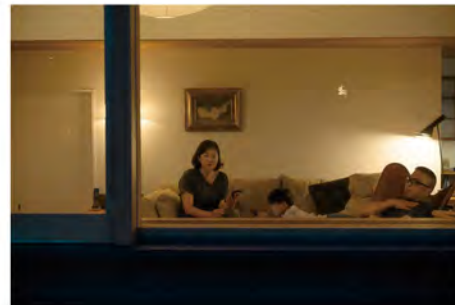
113 正面に見えるのはご両親の家。その脇に勝手口へ抜ける小径がある。家族は自分の家の玄関よりもこちらのルートを使うことが多いとか。手前左に見えるのは共有の物干しスペース。



「ご両親の家は「眺める庭」なので、こちらは「使える庭」に」と八島さん。フラットな場所とベンチがあると使いやすい。

親・子・孫の三世代を繋ぐ庭
 子世帯の南側のテラスは、親世帯側の「眺める庭」とは対照的な、パベキユーや花火もできる「使える庭」。公園のように歩き回れる中庭には、ヒメシヤラを中心に以前の庭の木々が生かされ、国道沿いの敷地にあつたソテツやドウダンツツジも大事に移植された。

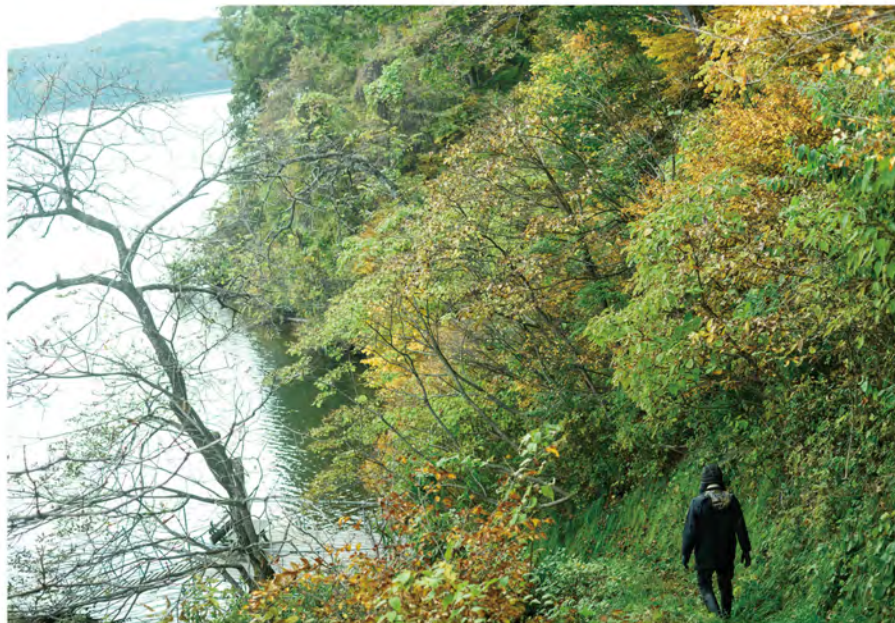
昔の家の記憶を残しつつ、機能的に暮らしやすく。時をかけてじっくり計画を練った2軒の家は、母屋と離れのいい関係を保ちながら、子の代、孫の代、その先もずっと上手に住み継がれていくにちがいない。



一方で、開放的なリビングの南側はあえて掃き出し窓にせず、腰壁を立ち上げて囲まれ感をつくっている。「南が掃き出し窓じゃなかったのは意外でしたが、夕子さんのスケッチを見て、あ、いいな、と。床から天井までの開口部というのは親の家でもう気が済んでましたから（笑）」



上 / 「FIXに見せたいけれど、開閉もしたいので」引き違いではなく滑り出し窓に。暖房はPSヒーター。小さいけれど設備は都会の住宅並みに充実している。下 / 別荘から湖の棧橋まで80メートルほど。冬はかんじきで雪を踏み固めて下りていく。



5 × 5 m で十分
湖畔に佇む
ミニマムハウス

晩秋の野尻湖畔。湖に向かって下る三日月形の土地で、建物を建てられる平らな場所はほんの少ししかない。ここで焚き火をするのが至福の時。